# 充実 CAMPUS LIFE

自分だけのキャンパスライフがある。ここならきっと見つけられる。例えば、「やらずに後悔したくない」という思いで学びと挑みの日々を重ねる浅田さんのように。

## 尊い命と向き合う「良医」を目指し、旺盛な知的好奇心をもって幅広い領域の学びに挑む。

医学部医学科 4学年

**浅田 遼**さん

### 今できる全てのことに真摯に向き合いながら着実に前に進みたい

「過去の記憶にないくらい多忙な毎日です」と話す浅田さんは、医学部医学科4学年。医学科のカリキュラムは3学年以降、一部の科目を除いて2カ月完結の短期集中型。1カ月置きに試験が実施されます。「次回は循環器病学、麻酔科学、検査診断学の3科目。どの科目も教科書だけで数百ページあり、勉強量は膨大。試験直前は食事の時間以外、ほぼ机に向かっています」とハードな勉強の日々を語る浅田さん。その言葉とは反対に表情は明るく、まなざしには生涯をかけて医学を究めるという強い覚悟が感じられます。

浅田さんの父親は医師。幼少時には、患者さんの回復を喜ぶ父親の横顔に将来の自分を重ね合わせていましたが、中高時代は数学教師に憧れ、地元の国公立大学に進路を決めていました。ところが、入学直前に親族や恩師が相次いで逝去。浅田さんは「尊い命と向き合う仕事がしたい」「いつか終わる命なら、その日まで悔いなく、充実した人生を選びたい」と痛切に感じ始めます。浅田さんの胸に幼いころの夢が鮮やかによみがえり、医学の道を志し、福岡大学医学部へ入学。

「何事も、やらずに後悔するより、挑んで納得したいと考える性格」と自己分析をする浅田さん。そのチャレンジマインドは、学業以外の面にも存分に発揮されています。所属する医学部テニス愛好会では3学年の時にキャプテンを務め、部員の半数が上級生である部をまとめました。また2014年の医学部学園祭「医学祭」では、実行委員も務めています。

もちろん、何よりもエネルギーを注ぐのは日々の学業。「特に、生体のメカニズムと疾病の機序を論理的に学ぶ神経内科学や、目には見えない『こころ』の奥に分け入る精神科学に興味があります。問診や診察を通して、臓器や人体の一部だけでなく全身を診る視点から疾患にアプローチする感染症学も面白い。どの授業にも毎回新しい発見や気付きがあり、知的好奇心が刺激されます」と話す浅田さん。理想の医師像を聞くと「良医」という答えが返ってきました。「特別な技能で名をはせる名医より、当たり前のことを当たり前にできる良医。わずかな異変のシグナルも見逃さず、常に適切な診断と処置を行える、誰からも信頼される医師を目指しています」。医学生としての学び、その大きな転換点となるのは、全国共用試験のOSCE（オスキー）とCBT。その後、いよいよ医療チームに実際に加わる2年間の臨床修練に臨みます。教室で学んだことを現場で実践する「次のステップ」を、心待ちにする浅田さんです。

1 テニス愛好会では毎年サークル旅行を実施。2013年は9月に1泊2日の鹿児島旅行。桜島をバックに記念撮影 2 2014年5月、医学部学園祭「医学祭」の実行委員で企画した新入生歓迎会 3 試験中でも就寝前の読書は欠かさない。文庫本の背表紙が並ぶ書棚から「今夜の1冊」を選ぶのが至福のひととき 4 よく利用するのは医学部の図書館。「調べものもすぐできるし集中できます」と浅田さん

## 好きな授業を PICK UP!

### 専門教育科目「循環器病学」

**吉兼 由佳子 医学部医学科 講師**

心臓や血管の疾患について幅広い視点から講義。毎回担当教員が変わり、循環器内科、小児科、心臓外科など、それぞれの専門領域に関する症例や知見を、多面的に伝えます。理論を肉付けする体験談も理解の手助けとなっています。

**浅田さんメモ①**

ひとときも休まず拍動し、全身に血液を送る心臓。その機能の破綻が疾病を呼び、ついには死に直面する事態に至ることもあります。循環器を学ぶことは、命を学ぶこと。そこにこの授業の魅力があると思います。

### 専門教育科目「脳神経病学」

**坪井 義夫 医学部医学科 教授**

医師として必要な神経学の基礎知識の習得を視野に、脳腫瘍や脳血管障害、感染性疾患、さらには認知症や脊髄疾患など、主要な神経系疾患の病因、病態、生理、症候、鑑別疾患、診断を学修。適切な対応をとることができる問題解決能力を身に付けます。

**浅田さんメモ②**

神経内科と脳外科の幅広い領域を学ぶ授業で、好奇心を大いに刺激されました。脳外科では、例えばくも膜下出血の手術について実際の術中の映像を見ながら学修。神経内科は原因と症状の因果関係が明確で、論理的思考能力を鍛えられました。

## サークル活動を学びに生かす

### 6学年40人をまとめあげた貴重な経験を医療チームのリーダーとして生かしたい

浅田さんが所属する医学部テニス愛好会の練習日は月・水・木と土日のどちらか1日。授業を受けた後、日没まで練習します。年2回の大会前には、練習にもいっそう力が入ります。

学業との両立は大変なのでは、と尋ねると「いえ、生活の一部ですから。頭を使った後に体を使うのは心身のバランスにもいい。それにサークルの効用はスポーツだけではありません」と浅田さん。3学年のとき、キャプテンを任された経験が大きな自信になったとか。「上級生の意見を聞き、下級生の要望を生かす。大変だなと思うこともありましたが、これも医療現場に出たときの予行演習とプラス思考で受け止め、前向きにやり遂げました」。1万人に1人の症例など、先輩に臨床修練の体験談を聞けるのも、サークルならではのメリット。そのために入部するメンバーもいるくらいです。「サークル活動には教室では得られない貴重な体験や出会いがあります」と浅田さんは付け加えました。

2013年8月の西医体（西日本の医学生によるテニス大会）。試合前に円陣を組んで気合いを入れた。

分厚いテキストには、ポイントを書き加えた付せん紙がびっしり。

## 浅田さんに聞きました!

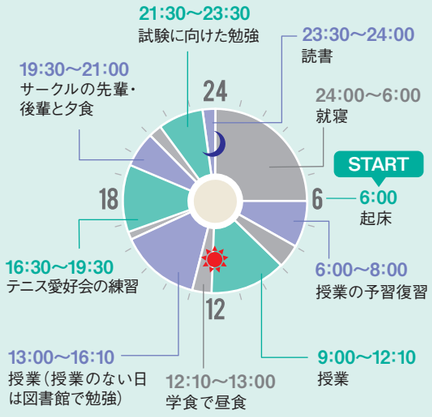
**勉強の合間の気分転換は？**

読書です。図書館では医学書に手を伸ばすことがほとんどですが、自宅では小説を読んでいます。ミステリーでは東野圭吾さんや宮部みゆきさん、『半沢直樹』が話題を呼んだ池井戸潤さんや伊坂幸太郎さんも好きな作家です。元医師の作家・南木佳士さんの、生死をテーマにした作品もよく読みます。

**キャンパスライフをひとことで例えると？**

「学ぶ」

ドクターの語源はラテン語の「教える人」だとか。教える際はもちろん、医療に携わる上では継続的な学びが必要。医学の世界で生きていくかぎり、学ぶ姿勢は生涯持ち続けるべきものだと思います。

## 浅田さんの1日

［テニス愛好会の練習がある月曜日のスケジュール］